

エンゼルのわが子へ

〈沖縄県〉 平安 香由美 60歳

「かわいい、可愛い、お母さんにお産の経験を見せてくれてありがとう。○○ちゃんのことはずっと忘れないよ。また会えるからね」と母親と父親は交互に小さな赤ちゃんを抱っこしながらとめどなく流れる涙を拭うことができなかった。

十年間の不妊治療後、やっと妊娠しその夫婦は喜びの絶頂にいた。しかし、妊娠十週に入ったときエコーに映る胎児に異変を指摘された。胎児水腫たいじすいしゅだった。生存確率がほとんどなく、多くは子宮内で死亡するため、妊娠途中でお腹の中の赤ちゃんを外に出す処置が施された。母親は痛みと悲しみの苦痛の中、赤ちゃんは心臓の止まった状態で黒い皮膚の色で生まれてきた。首

の周りが水ぶくれのように異常に膨れ上がり、全身ブヨブヨして数カ所の皮膚がめくれ水分がたらたら流れ出ていた。

主治医はその赤ちゃんの姿を見て「母親に赤ちゃんを会わせる前に、父親の思いを聞いてください」と気遣った。父親は児と対面した直後、何の迷いもなくきっぱりと言った。「私たちの子です。母親にも会わせませす」

「会わずに別れることがもつと辛いことですからね」この夫婦は赤ちゃんが生まれる前から決めていたのだろう。どんな姿で生まれてきてもぜひ抱っこしてあげたいと。赤ちゃんの肌からにじみ出る水

分をガーゼで巻いた綿に受け止めさせ、温めたバスタオルでくるみ父親に抱っこしてもらった。その後、母親との対面になった。その時の母親の第一声が冒頭の言葉であった。

助産師になつて37年間、このような対面は初めてだった。これまでの経験では、父親は母親に赤ちゃんを会わせることを拒み、母親も会うことは辛いからと対面しないでの別れが日常であった。母親は私に「子宮筋腫の手術を受けているのでお産は帝王切開しかないと言われていました。この子のおかげで普通のお産を経験でき感謝しています」と言った。エンゼルになったわが子への愛があふれていた。